

岡山大学

MONTHLY DIGEST

VOL. 7
2016. 11

TOPICS

1

「学都基金発起人会」を発足

本学は10月31日、国際学術都市「学都岡山」創生のために幅広く活用する「学都基金」の取り組みを支援する「学都基金発起人会」を発足しました。

発起人会には学都基金の趣旨に賛同した県内の主な経済団体や企業、本学OB、自治体、県外の著名財界人、学内関係者ら約70人が出席。同基金を県内外に幅広く周知するとともに、本格的な募金活動に向け学内外の意思結集を図りました。

森田潔学長が「大学の財政状況は非常に厳しい。基金に対して、忌憚のないご意見をいただきたい」とあいさつ。発起人会の一人で、全学同窓会の小長啓一会長が、学都基金発起人会会長に就任し「大学の教育・研究活動を充実させるため、協力いただきたい」と話しました。

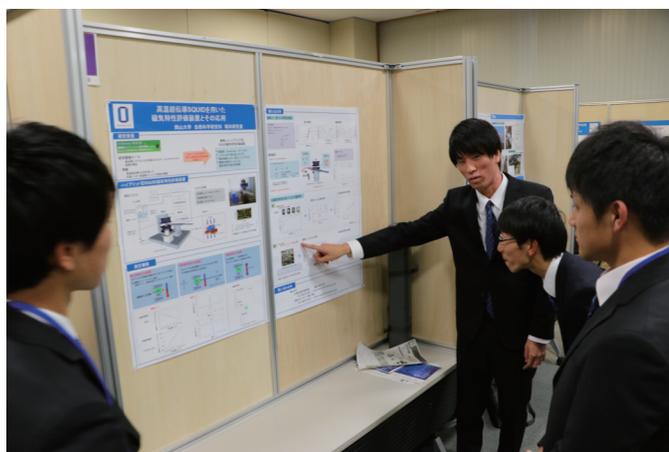
参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id6245.html

TOPICS

2

岡山大学知恵の見本市2016を開催

本学は11月11日、「岡山大学知恵の見本市2016～未来を見つめて～」を創立五十周年記念館で開催しました。本見本市には、企業関係者、地域住民、教職員、学生ら約410人が参加。特別講演や研究紹介プレゼンテーション、59件のブース展示が行われました。



講演に先立ち、山本進一理事・副学長（研究担当）が開会のあいさつ。（公財）九州先端科学技術研究所の村上和彰副所長が、「IoT×AIで私たちの生活はどう変わる？」と題して講演しました。

ブース展示会場では、本学の教員や学生が、ものづくりや、医療・福祉、農業・環境など7分野をテーマに研究成果を紹介。発表スペースでは、教員と学生による3件の研究紹介プレゼンテーションが行われ、活発な意見交換が行われました。最後に、来場者の投票により優秀出展者を表彰しました。

本見本市は、2006年から毎年開催し、今年で11回目。新たな産学官連携の推進と、地域におけるイノベーション創出の場となることを期待しています。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id6294.html

最近の大学の動き

次期国立大学法人岡山大学長適任者の決定

国立大学法人岡山大学学長選考会議は11月21日、かねてから選考中であった国立大学法人岡山大学長適任者として、榎野 博史 氏を選考し、次期国立大学法人岡山大学長適任者と決定しました。

任期は、平成29年4月1日から平成33年3月31日までです。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id6293.html

TOPICS
3

ウガンダ・マケレレ大学と 大学間協定を締結

本学は11月8日、ウガンダ共和国のマケレレ大学と大学間協定を締結しました。調印式は在ウガンダ日本国大使館で行われ、亀田和明特命全権大使と両大学の教職員約30人が参加。森田潔学長とマケレレ大学のVice-chancellor John Ddumba-Ssentamuが協定書に署名しました。

資源植物科学研究所と農学部は、長年にわたり、学内COEプロジェクト(2008年)、日本学術振興会国際事業(2010年-2012年、2014年-2016年)、およびJICA事業(2014年-)などの援助を得て東アフリカとの国際交流を継続的に実施。2015年度からはマケレレ大学と交流を始め、ワークショップの開催や若手研究員の育成、学生交流など幅広く行ってきました。今回の協定締結により、今後のさらなる交流の発展が期待されます。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id6305.html

TOPICS
4

スーパーグローバルホームカミングデイ2016を開催



本学は10月22日、同窓生や地域の人を招き、大学に親んでもらうイベント「スーパーグローバルホームカミングデイ2016」を津島キャンパスで開催しました。訪れた約2,400人の来場者はさまざまな企画を楽しみながら互いに交流を深めました。

本イベントは、応援団総部による力強い演舞で開幕。メイン会場の創立五十周年記念館では、歓迎式典や岡山大学Alumni(全学同窓会)総会、「アジアのノーベル賞」と言われるラモン・マグサイサイ賞の受賞者であるインドネシアの社会起業家トウリ・ムンプニ氏による記念講演会を開催しました。このほか、学生音楽系サークル・団体が出演する「ミュージックフェスティバル」や、工学部の技術職員による国際化学実験教室、茶道部によるお茶席等も行われました。

メイン会場周辺では、在学生在が同窓生にお茶とお菓子をふるまいながら本学の今と昔を語り合う「思い出茶屋」や、同窓生・在学生・留学生らによる模擬店のテントが立ち並び、餅つきの実演など多彩な催しも実施。学生のうらじゃ連である「楽鬼(らっき)」や「笑輝(しょうき)」による演舞や、Jテラスカフェでの音楽ライブ、各学部の講演会、シンポジウム等も行われ、来場者は楽しそうに各会場を回っていました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id6246.html

RESEARCH
HIGHLIGHTS

1

くも膜下出血後の脳血管攣縮(れんしゅく)のメカニズムを解明 治療法開発に向けた大きな一歩に

本学大学院医歯薬学総合研究科の西堀正洋教授(薬理学)と伊達勲教授(脳神経外科学)の研究グループは、くも膜下出血後に脳血管で生じる遅発性脳血管攣縮のメカニズムを明らかにしました。本研究成果は11月24日(英国時間午前10時)、英国の科学雑誌「Scientific Reports」に掲載されました。

本研究グループは、ラットで作製されたくも膜下出血モデルで、脳血管の収縮メカニズムに、収縮を誘発する受容体グループの発現上昇が関与すること、それらの上昇が、血管壁の平滑筋細胞から放出される細胞内タンパク質High Mobility Group Box-1 (HMGB1)の働きによることを明らかにしました。また、出血2日後に生じる血管攣縮は、HMGB1の働きを中和する抗HMGB1抗体の投与によって強く抑制され、随伴する神経症状も劇的に改善させることが分かりました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/release/release_id428.html

RESEARCH
HIGHLIGHTS

2

自律型水中ロボットの自動充電実用化へ前進 複眼カメラによる空間立体認識で、水中の嵌合(かんごう)穴へのドッキングに成功

本学大学院自然科学研究科(工)の見浪護教授と松野隆幸講師の研究グループは、九州工業大学、東京大学の協力を得て、自律型水中ロボットAUV(Autonomous Underwater Vehicle)の水中嵌合実験に成功しました。

本学が開発した実時間複眼3次元立体認識(3D-MoS: 3Dimension Move on Sensing)を九工大所有の自律型水中ロボットAUV「ツナサンド2」に搭載し、東京大の実験水槽を用いて実験を行いました。

AUVの自動嵌合はロボットのエネルギー源であるバッテリーの海底での自動充電につながり、深海底での自律型知能ロボットの長時間の自律連続運転や作業を行うことが可能になります。本技術は、長期間連続航行を要する海底資源探査・回収や海中未確認生物の生態調査等への利用が期待されます。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/release/release_id426.html

